

検査で異常を指摘された

血液検査で PSA が高いと言われた

PSA は前立腺特異抗原 (prostate specific antigen) の英語の頭文字を並べた略語で、前立腺でのみ産生されるたんぱく質です。PSA の基準値としては一般的に 4.0ng/ml という値が用いられています。がんの発見される割合は PSA 値が 4~10ng/ml のグレーゾーンと呼ばれる値で 4 人に 1 人、10ng/ml 以上になると 2 人に 1 人とされています。「PSA が高い」からすぐに「前立腺がん」ということではありませんが、なんらかの前立腺の病気がある可能性がありますので、ぜひ泌尿器科専門医を受診いただきたいと思います。

尿検査で血が混じっているとされた

尿に血がまじる状態にはふたつあります。一つ目は尿の色が赤くなる状態で (肉眼的血尿)、二つ目は色の変化は分からないが尿検査にて血が混じっている (顕微鏡的血尿、尿潜血) 状態です。肉眼的血尿の場合は、膀胱がんや腎がんなどと診断される場合があります、必ず泌尿器科専門医の検査を受けてください。一方、健診にて尿潜血を指摘される人も多いと思います。このような場合には、精査をしても明らかな異常が見つからないことの方が多いですが、必ず一回は検査を受けて種々の病気がないことを確認しておきましょう。

結石があると言われた

尿路結石は、尿路 (腎臓から尿道までのおしっこの通り道) にできた石状のかたまりのことです。背中やわき腹に激痛が生じたり、血尿や頻尿、吐き気を伴うこともあります。尿路結石を一生に一度作る人は、男性の 7 人に 1 人、女性の 15 人に 1 人とされています。動物性タンパク質のとり過ぎなどの生活習慣が尿路結石の発症と関係していると考えられています。小さな結石の場合は自然な排石が期待できますが、自然排石が難しいケースでは体外衝撃波碎石術や経尿道的尿管碎石術などの結石を取り除く治療を検討します。

超音波検査で副腎に異常があると言われた

副腎とは腎臓のすぐ上にある血圧、糖、電解質などをコントロールする様々なホルモンを分泌する 1~2cm 程度の小さな臓器です。通常超音波ではほとんど見えませんが、副腎が大きくなる、副腎に腫瘍ができるといった異常が生じると超音波検査でわかることがあります。超音波検査で異常が指摘された場合には CT や MRI などより詳しい画像の検査やホルモンの分泌に異常がないかを調べる採血検査などを行うことがあります。

超音波検査で腎臓に異常があると言われた

腎臓は尿を生成したり、貧血や血圧をコントロールする物質を分泌したりする左右二つの大切な臓器です。超音波検査でわかる異常は、腫瘍（良性、悪性）、奇形、萎縮、尿路の拡張など多種多彩です。以前はなかった異常を認めたのであれば、放っておけない病気の可能性もあります。泌尿器科専門医を受診していただくか、CT などの精査が必要です。

尿検査で蛋白尿がでていと言われた

蛋白尿が陽性の場合、病的かそうでないかを見分ける必要があります。とくに、女性の場合では生殖器よりの分泌物の混入がしばしば蛋白尿と間違えることがあります。男性でも尿道分泌物の混入の場合が有り、排尿前半の尿をとらず、中間尿採取が必要です。

蛋白尿陽性の場合、尿路感染、良性蛋白尿（運動後や発熱時、起立性蛋白尿など）、尿路腫瘍、糸球体腎炎、ネフローゼ症候群などの鑑別が必要です。

尿検査で尿が濁っているとされた

混濁尿にはいろいろな原因が有り、病気でないこともよく有ります。尿の pH が変化することにより膀胱内で尿の正常成分の結晶が析出することもあるからです。アルカリ尿ではリン酸塩が、酸性尿では尿酸塩のためにしばしば混濁を生じます。また、冷蔵庫や室温に放置するだけでも混濁を生じる場合があります。しかし、尿路感染や血尿でも混濁が見られる場合が有りますので、病院で尿沈渣検査をうけていただければ異常のチェックが出来ます。

（執筆者：西神戸医療センター 泌尿器科 伊藤哲之）